

# 情報・知識・制度

## 情報と制度知の二重螺旋

### I. 序

社会は設計できるか、あるいは社会の設計のためには何が  
必要か。欠陥の多い計算装置である市場の代わりにより正確  
な計算機を人間の手で作り出すことは可能か。古典的な一般  
均衡理論では、市場が均衡に到達するためには情報が完全で  
あることが条件とされる。これは同時に情報が不完全である  
と、市場は均衡に到達できないということを意味する。した  
がつて、完全な情報を集めることができれば政府当局は市場  
に取って代わることが可能である、と一九三〇年代の一部の  
経済学者は考えた。

この主張が含む「情報」という概念の曖昧さに対し、最初  
に疑問を抱いたのは、オーストリア学派の経済学者フリード

リツヒ・ハイエクである。ハイエクは、一般均衡理論が、  
均衡を成立させる情報があるか無いかで均衡が成立するか否  
かを問うトートロジーに過ぎないことを看破した。当時の一  
般均衡理論が用いていた「情報」という言葉は、理論の発達  
過程においてその実質を喪失していたのである。

しばしば見られることだが、ある言葉が頻繁に使われ出す  
と、言葉自体がその意味するものから切り離され、漠然とし  
たイメージが人の想像力をかき立てるようになる。アルビ  
ン・トフラーが『第三の波』の中で情報によるわれわれの生  
活の革命的な変化を予想して以来、現実の様々なメディアの  
革新を背景として、大量情報時代の到来について飽きるほど  
語られてきたし、インターネットや携帯端末の普及は、それ  
を証明しているかのように見える。だが、これは単に物理的

江頭進

なメディアの発達に過ぎない。「大量」の「情報」は、依然としてぬえのごとく姿形が明らかではない。

この理由は単純である。情報はあくまでそれを受け取る受容者に意識的に解釈されて初めて有用なものとなる。これは情報が大量にあつてもそれのみでは有用性を持つわけではなく、認識の枠組みとの相互作用の中で意味を付与されるからである。人間の認識の枠組みは形成の過程においてその人間が置かれた環境から影響を受ける。この環境は、単なる一時的な相互作用の結果生じているものではなく、より長い時間の中で形成されるため安定的な性格を持っている。この時間の流れとともに環境の中にかつてその上で活動した人々の経験が埋め込まれていく。これらの経験は、再びその上で行為する人々によって再利用されるのであるが、その場合これらの過去の出来事に関する知識は、一時的な情報とは異なつたいくつかの特徴を示すことになる。しかし、このことを論じる前にいくつかの概念定義を行わなければならない。

## II. 知識と情報

われわれの世界は知識に満ちている。われわれは大量の知識を利用しながら日々の生活を送っている。しかし、一口に「知識」と言つても、いくつかの分類が可能であろう。知識は、その所有の形態から個人的知識と社会的知識に大別される。個人的知識はある特殊な行為に関して特定の個人にのみ

所有されている知識である。これに対して、一人の人間の枠を越えた社会的な知識が存在する。社会的知識は直接的には個人によって所有されているのだが、一人の個人が消滅してもその知識が失われることはない。このような類の知識は、一つの種の中に共通する遺伝子のように組み込まれているのだ。

さて、知識の種類についてもう一つ古典的な分類法が存在する。マイケル・ポラニーが強調した明示知と暗黙知の区別である (Polanyi, 1966)。前者が言葉によって他者に伝えることができる (言い換えれば理性的に拾得できる) ものであるのに対して、後者は明文化することができず、ただ模倣のみを通じて不完全な形でしか伝授されない。暗黙知はさらに一般化できないという重要な特徴を持つ。

ハイエクが述べたように、われわれの社会に存在する知識のほとんどが、一般化できない限局的なものである。つまり、それらの知識はある時代のある地域で特定の生活を営む人々の間でのみ有用な知識なのである。暗黙知と呼ばれるこれらの知識は、必然的にきわめて共同体的色彩の強いものとなる。これは地理的な地域共同体だけでなく、ある価値観と特定の目的が重なり合った部分で生じる理念的な共同体においても存在するものである。そのような知識はしばしば制度として立ち現れ、人々はそれに大きな関心を払わないにもかかわらずその恩恵を受けて行動するが可能である。このよう

なルールを経済学では伝統的に「制度」と呼ばれてきた。制度は我々の行為基準を形成し、個々人の内在的な価値観にまで大きな影響を及ぼす。このように明示的もしくは暗黙的にわれわれの行動パターンを規定する制度の中に含まれた知識を制度知と呼ぶ。制度知の特徴は、われわれがその知識を直接知っていなくても、制度に従って行動することによってそれらの知識を利用することが可能である、という点にある。「文明はわれわれがそのことについて考えること無しに実行できる作業の数を増やすことによつて進歩するのである」というホワイトヘッドの言葉はまさにこの制度知の進化を表しているのだ。

知識と同じくわれわれの世界は情報に溢れている。しばしば混同されて用いられているが、知識と情報は区別されるべきものである。なぜなら知識はそれにかかわる人々の思考や選好を形作るものであるが、情報はそれを受けるものによつて意味づけをされるものであるからである。情報はそれを受ける人々の理性との関係の中で初めて意味を付与される。目的を持たない人々にとつてそれは雑音に過ぎない。informationという語がきわめて中立的なニュアンスを持つのは、それに接する個人の側に積極的な意識が必要とされることとの裏返しである。現代社会においては情報ですら利益を生む商品として取り扱われるが、これは情報が、特定の体系の中でのみ意味を持つ知識とは異なり、取引可能な断片に分割

できるからである。情報はその受容者に意識的な判断を要求する。しかし、情報が理性的な解釈を必要とするということからは、同時に受容者が解釈のための枠組みを前もって持つていなければならぬということである。ハイエクが情報について多くを語らず、知識の研究を中心においたのは、前者が枠組みの存在を前提とし、後者が枠組みを形作るものであったからであろう。

実際には知識と情報の境界は必ずしも明確ではない。むしろそれが明確に分けられないという部分に各概念の本質があるのだし、知識の情報化を考えるのが本稿のテーマでもある。ただし両者の決定的な違いは知識が模倣を通じて獲得されるのに対して、情報が理性的に取捨選択されるということであろう。ハイエク(1962, 1988)が述べるように、模倣という行為は本能的行為と理性的行為のちょうど中間的なものである。人々は模倣という行為を通じて自分の周囲の人々の間に存在する知識を獲得し、自らの認識、思考の枠組みを形成する。そして形成された枠組みを用いながら理性的な判断を下すようになるのである(一)。

知識が限局的性格を持つことは既に述べたが、それらはしばしば、特定の集団内の伝統や慣習として存在する。これは制度知がわれわれの認識の枠組みの形成に大きな影響を与えているということの意味している。われわれのアイデンティティは、決して個人特殊なものではなく、共同体の持つ価

値観によって形成されるものであり、共同体から切り離された「個性」などという考え方は幻想に過ぎないとする主張が一部の共同体主義者から投げかけられている。この考え方は、それ自体は正しくても、個人の属する社会の重層性についての考慮を欠落しているので、あまり的確な批判ではない。個性が、彼もしくは彼女の属するいくつもの社会の価値観の集合積として表されることを認めるならば、それは彼自身もしくは彼女自身の経験が、その個性を決定していると言うことと大きな差は無くなるであろう。また、ハイエクは次のように述べる。

「……、我々が、我々自身に非常によく似た人間の行為の解釈から、我々とは非常に異なった環境に生活する人間の行為の解釈に移行するに従って、人々の行為を解釈するのに当たっての有用さを失うのはもつとも具体的な概念であり、最後まで残ってわれわれの役に立つのは、もつとも一般的であり、かつ抽象的な概念であるということである。」(1949, p.67, 邦訳 p.92)

つまり、人間の認識を社会的知識が形作るとしても、それはそれが含んでいる具体的な経験がそのまま反映されるのではなく、抽象化された形で反映されるに過ぎない。そこに含まれる知識が、具体的な経験に基づくものであっても制度そ

のものに接する人々は、そのような個別性を意識する必要がないことが制度の特徴でもあるのだ。

だが、極端な共同体主義を退けるとしても、われわれの認識の枠組みが、社会的知識によって重要な部分が構成されているということは事実である。その代表的な例が言語である。言語は、一人一人の人間が生まれる前から存在し、模倣を通じて学習される。そして、学習された言語は、われわれの思考の様式を決定する。日本語を拾得した人々は日本語の語彙の範囲で思考し認識を行う。また、ある単語を別の言葉で表現するということが、しばしば困難であるのは、その単語の中には言語化されない知識が埋め込まれているからだ。例えば、「五月雨」という単語を説明しようとするには困難が伴うし、いかなる説明も正確さを書いてしまう恐れがあるであろう。しかし、「五月雨」という単語を見た瞬間に具体的なイメージが脳裏に浮かびそれに対する複雑な感情を感じるのは、この単語が生成する過程で獲得された様々な知識が、「五月雨」という言葉の中に含意されているからである。言語についてはことさら強調するまでもなく多くの研究が存在するが、その議論は他の社会的制度の理解に適用が可能である(2)。

個人的知識の多くの部分が、社会的知識の模倣によって獲得されたものであることを考慮すれば、個人の判断力は豊かな社会的知識の背景が必要であることは自明であろう(3)。

この事實は、資本主義特有の問題ではなく、あらゆる社会で共通する事實である。伝統的社會を見直し、多くを排除しようとした社会主義諸国ですら、人間が理性的知識として蓄えることができる量が、制度の中に含まれた知識の量に比べて遙かに少なく、それがわれわれの社会を支えるには過少であったという理由で、その「科学的」という看板とは裏腹に制度知の利用を余儀なくされていたのである。ハイエクの反合理主義はこのような制度知の無視に対して採られたものである。だが、ポラニーの言葉を待つまでもなく、科学そのものが制度知の体系である。制度知の体系を無視すると「科学的な」国家運営もままならなかったことに、社会主義国家のジレンマがあった。

### Ⅲ. 情報縮約の装置としての制度

しかし、皮肉なことに情報メディアの発達とともに、まさきに流されたのはこのような限局的な知識であった。それに関わる人々の間でのみ意味を持ちうる知識が、それが有効な「場」から切り離され一個の情報として流動化したのである。これを「知識の情報化」と呼ぶことができるであろう。これは、どの情報が誰の役に立つのかということが事前にはわからないという不確定性の結果かもしれない。しかし、問題はそこにはなく、情報はあくまで孤立した商品であり、人々にとっては取捨選択の対象でしかないことにある。それ

が組み込まれていた体系から切り離され断片化された元知識がコード化されないままに流されてもほとんど意味がない。インターネットの検索画面に何の役にも立たない個別情報が並んでいることを見ればこれは明らかである。

だが、その反面、情報は資本主義社会において、実際に利潤を生み出している。言うまでもないことだが、財・サービスの供給主体が、他に先駆けて潜在的な需要に関する情報が入手し行動することで、独占的な利潤を獲得することができる。それが利潤に直結するからこそ情報自身が商品的価値を持ちうることは、いまや言い古された事実であろう。これは既存の企業が既存の市場で現状を維持する場合にも同様である。見かけの定常状態を維持するためには、絶えず市場内での競争にうち勝っていなければならない。

このように、現実社会においては、情報は均衡と安定を攪乱する要素が多いにもかかわらず、古典的な一般均衡理論では情報がより「完全であればあるほど」均衡に近づくことになっている。この「完全情報」という用語が表しているように、ここには情報に関する致命的な誤解が存在する。完全情報と均衡という考え方には、あらかじめ理想化された状態があり、それを達成するために「必要な」有限の情報が存在するという暗黙の前提が存在するからである。この議論は、一般均衡理論だけでなくパレート最適という概念を用いる全ての議論に当てはまるであろう。例え、不完全情報を仮定した

議論でも、情報の量が有限であるとする前提から抜けられて  
いるわけではない。

だが、先述した現実世界の市場過程では、到達すべき理想  
の状態という概念がそもそも存在しない。したがって、「必  
要な有限の」情報という考え方も存在しない。現実の市場過  
程では際限なく情報は必要とされるのである。それでは、情  
報は、なぜ際限なく必要とされるのかということについて、  
二つの理由が考えられる。一つは、先ほどから述べているよ  
うに到達すべき終着状態がそもそも存在しないからであり、  
二つ目は、ほとんどの情報単独でそれ自身の真偽を証明でき  
ないからである。たとえばAという情報入手した場合、こ  
れの信憑性を確認するための追加的情報Bが必要になる。さ  
らにその追加情報Bを確認するための情報C……というよう  
に無限の連鎖は、絶対的に真である情報に行き着くまで断ち  
切ることができない（そのような情報があるとすれば、であ  
るが）（4）。

しかし実際には、われわれは自分の影に追いつこうとする  
ような試みをするのではなく、またする必要もない。これは、  
われわれは完全な情報入手しなくても、ある程度の範囲で  
意志決定をなし得るようなメカニズムを持っているからであ  
り、先述した制度がこの機能を果たしているのである。ハイ  
エクは、情報が不完全であるが故に市場が必要なのである、  
ということを指摘した。制度は人々の行動の相関から生ま

れ、人々の行動を規制する。他の制度と同じく、市場もまた  
明示的もしくは暗黙的なルールの束なのである。たとえば、  
市場では、価格と数量に関する情報の中により多くの知識  
がコード化されている。価格は、他者の行動、すなわち、財  
の需要と供給に関する情報を反映しているが、逆に言うところ  
れ以外の情報や知識をすべて捨象している。この断絶故に、  
価格情報を見る人々は、きわめて私的な選好にのみ従って行  
動することができるのである。このことは価格が存在しない  
ような交換、贈与や互酬との差異を考えてみればわかるだろ  
う。贈与や互酬の場合、基本的には相対であり、間に人の顔  
を消し去り抽象化する市場が存在しない。それ故、財の提供  
者、受領者についての多くの情報が必要である。もちろん、  
このような行為が一度きりではなく繰り返し反復されること  
によって、そこに一定の様式が生まれ制度化されるにつれ、  
必要とされる情報、知識の量は減少する。しかし、貨幣を媒  
介とした交換に比べると必要量ははるかに多い。むしろ、贈  
与、互酬、交換へと続く流れは、関係者が直接必要とする情  
報や知識の量の減少と、それを支える制度に含まれる知識の  
増加（ルールの複雑化）によって測ることができるだろう。  
人々は価格と数量情報に注視するだけで背後にある多くの情  
報化されない知識を利用することができるのである。

さて、市場のような制度がどのような性格のものかという  
説明に続いて、今度は情報がどのようにして解釈されるのか

という問題に焦点を当てる必要がある。ここで重要になるのが、情報を受け取る側の制度化された知識である。われわれは、情報の解釈に先立ってその解釈のための枠組みが必要である。人間の内部において情報の処理は四つの方法で分類できる。一つ目は、本能的反射、二つ目は制度的処理、三つ目は理性的判断、四つ目はギャンブル的処理である。本能的反射は、きわめて原始的な情報処理であるが、われわれの意志決定において重要な役割を果たしている。しばしば、これは無視されるか人間の非合理性の現れとして解釈されてしまいかであるが、本来経済合理的であるべきはずの企業の意志決定にも、本能的反射の延長（嫌悪感、嫉妬心等々）が観察できる。しかし、本能的反射はここでの問題にとってそれほど重要な意味を持たない。

問題は制度的処理と理性的処理の関係である。ハイエクが伝統や慣習の重要性を強調したことは既に述べたが、彼のいう伝統、慣習は日本語のイメージするものよりも幅広い概念である。これは特定の情報に対して、定型化された一連の処理を行う手続きとして解釈されるべきであろう。たとえば、異邦人はとりあえず村から追い出す、というルールを持っている共同体を考えてみよう。もともと、このルールは異邦人によって村の中で破壊活動が行われたとか、伝染病をまき散らされたといった経験から作られたのかもしれない。しかし、その過去の災厄についての記憶が失われてからも、この

ルールは存在し続け、村人は異邦人を追い出し続ける。この過程で、異邦人を個別に審査するという行為は存在しない。村は異邦人を無差別に追放することによって、個別審査のためのコストを節約しているし、異邦人がもたらす不確実な未来の到来を回避しているのである。

このやや極端でネガティブな例が示しているように、制度は情報処理に際するコストを削減し、不確実性を減少させるように働く。制度はそもそも過去の具体的な経験の中から作り出されたものであるという点で知識を集約したものである。と、同時に過去の具体的な事例からは切り離されているのである。村人は過去の災厄の記憶に従って、理性的に判断を行った結果、異邦人を追い出しているわけではない。制度の中に過去の具体的な経験は埋没し、ルールは次第に抽象化されていく。ルールは抽象化されることによって適用可能な範囲を拡大し、その結果一つ一つの事例ごとに逐一意識的な再考を必要としなくなるのである。

大量の情報があってもそれを処理する知識が受容者の方に無ければ無意味である、という指摘はしばしばなされているが、実際には個人の持ちうる処理能力は程度の差はあれ大きなものではない。むしろ、社会的に見れば個人のレベルで処理している情報はわずかであり、そのほとんどは制度的に処理されていると言ってよい。われわれは全ての行為についていちいち判断しないし、そもそも全ての情報を受け取ること

もしない。大量の情報に人が直面するとき重要なことは、個人の能力の向上ではなく、それを抽象化し自動的に処理できるような制度の生成なのである。市場経済において市場が行っていることはまさに大量情報の処理である。社会主義経済において国家当局がなしえなかったのは必要な情報の収集だけでなく、情報を集めなくて済むような制度的対応だったのである。市場経済ではその歴史的過程での多くの成功と失敗の中で、制度が形成されていく。これには莫大な時間が投入され、多くのコストが支払われていることは確かである。しかし、それぞれが具体的な行為に結びついたものであるが故に、人間が理性的な設計によって作りだしたものよりもより行き届いたものとなる。

このようなハイエクの視点に基づいた市場観にもいくつかの問題点が存在する。例えば、このような制度は個人の目には、行動の自由を束縛する障害として映るかも知れない。実際の問題としてこれは深刻であり、制度が具体的な経験とは切り離されていればいるほど、人々の批判の対象になりやすい。国際的な貿易に際してその国独自の慣行がしばしば他国の企業の参入の障害となり批判されるのはこのためである。制度が関係者間で時間をかけて形成されなければならぬものであるのに対して、新規の参入は突然発生する。この突然の出来事に対して、保守的な態度があまり説得力を持たないのは、単に公正さというような道徳的な問題からではな

く、既存の制度の中に含まれた知識では事態の新しい局面に対処できないからである。安定を求めるために政治的には保守的である方がよい、とされるのは制度の中に内在する知識が外部もしくは内部の新たな情報を十分処理できる場合のみである。この場合、理性的判断により意志決定に何らかの正統性を与えるか、それとも多数決投票のように一種のギャンブル的な決定に全てを委ねるしかない。制度知は大量の情報を縮約するが、すべてを処理しきるわけではない。ハイエクの議論では制度的に処理できない問題についての対応が明確ではない。

だが、理性的判断やギャンブル的処理が、制度的処理の役割を代替できないのは明らかである。なぜなら、理性的判断は日常の情報処理としてはコストがかかり過ぎるし、ギャンブル的処理は不確実性を減少させないからだ。一時的な処理の後にはやはり新たな制度の生成を待たなければならない。

#### IV. 制度と企業家精神

ここまで、制度がわれわれの社会の中でどのように機能しているかという問題について述べてきたが、現代においてこの制度的役割が十分に評価されているとは言いがたい。資本主義の原理を私的利益の追求に関する目的合理的行動として定義するならば、むしろこの原理は市場社会に安定性をもたらす制度生成に対立する可能性がある。なぜなら制度がもたら



そうとする不確実性の縮減機能と、私的な利益の追求行動はしばしば矛盾するからだ。

株式市場を例に採ってみよう。株価もまた財の価格であることは言うまでもないが、この価格は特殊な条件の下で変動する。株式は財そのものから得られる効用ではなく、価格が上下することによって生まれる利ざやを目的として売買される。したがって、全ての人々が、明日株価が上昇すると知っている場合には誰も株式を売らないし、下落すると考えている場合に購入する者はいない。株式の売買は原理上、未来に対する不確実性が存在し、故にそれに対する各人の予測が異なっているからこそ成立するのである。

また、競争過程では正常利潤に加えて超過利潤の獲得も目的とされる。均衡点では消滅すると考えられる故に一般に経済学では考慮されないこの先駆けのリスクに対する報酬は、産業が生成するときもしくはは新技術が投入されるとき的重要なインセンティブとなる。シユンペーターが述べた、あるいはカーズナーが強調した企業家精神はすべてこの超過利潤を目指して発揮される。企業家の特長は、不確実性を既存の制度ではなく、特殊な才能を通じて処理するところにある。企業家は潜在化している知識を掘り起こし情報化することによって、既存の体系の中に利潤機会を見出し得る。不確実性下での知識の情報化は、シユンペーターの言う資本の再結合の中心的な活動となる。

企業家精神は、資本主義の原動力であるが、不確実性の存在を必要とするという点で、そして知識の情報化を行うという点で、市場の持つ安定化機能と対立する。言い換えれば、ビジネス・チャンスが広がっているということは、この意味で不確実性の増大と並行しているのだ。これは直ちに市場社会の崩壊を意味するわけではなく、知識の情報化の危険性を指摘することは短絡的であるが、論理的な構造のもたらす傾向を知ることが重要である。

知識の情報化という過程は、ただ単に個別情報の流動化という以上に問題を含んでいる。知識の本質はマイケル・ポラニーが指摘したように、言語化できる明示知と言語化できない暗黙知の部分に分けることができるという点にある。知識の情報化という行為は、具体的には言語化であり、言語化できない部分の捨象を意味する。ところが情報のみで構成される推論過程では情報の無制限性によって、意志決定を下すことができない。とりあえずの情報の範囲内で意志決定をさせるのは、むしろ個々人の知識の中にある暗黙知の部分である。知識はその社会性のために個々人の価値観を形成し、必ずしも理性的ではない価値合理的な決定を可能にする。二つの干し草のちようど中間に置かれた牛が餓死してしまう例えを持ち出すまでもなく、情報そのものは意志決定に決定的な役割を果たし得ない。牛が実際には餓死しないのは、牛の内部に情報の理性的な解釈を越えた暗黙知の次元が存在するからであ

る。大量の情報が集まれば集まるほど、「AでもありBでもある」とか、「Aも正しいがBも正しい」といった曖昧な態度にならざるを得ないのは、解釈者の背景に独断的な判断を下すための価値観が存在しないからである。

皮肉なことに、知識の情報化は二つの面で企業家精神をも衰退させる危険性を秘めている。一つは、不確実性の上昇はリスクの上昇である。企業家精神を発揮する人々には他の人々が少なくとも当面の間、既存の秩序に従って行動するであろうという前提が必要である。この環境に対する静態的仮定により、革新的行動を採ろうとする者は不確実性を縮減することができるのである。これは、逆に全ての人々が革新的行動を望み、人々が行動の与件として既存の秩序をあてにできなくなってしまうと、不確実性の制度的な減少が不可能になることを意味する。言わば、個々の人々は孤立して嵐の荒野に立たなければならなくなるのである。結果として、成功の確率は著しく下がり、人々はより保守的にならざるを得なくなるであろう。全ての人々にビジネス・チャンスがあるということは全ての人がチャンスを活かさない可能性を含意している。

不確実性が企業家精神を衰退させるもう一つの側面は、制度知による価値観の形成と関係している。企業家精神自体は理性的な判断ではなく、知識に基づく価値合理的な行動によるものである。個人的なレベルでは、保守的に行動すること

によっても十分生き残れるような状況で企業家精神を発揮することは、必ずしも目的合理的な行動とは言えない。もし仮に、現状が維持されたときに得られる将来所得の流列と、革新的行動の結果期待される主観的に計算されたりリスクで割り引いた将来所得の流列を比較して人は行動できるとしても、なぜ確率的にしか表されない未来に進んで身を投げ出そうとするのかという説明にはならない。革新的行動をとる人々が、移民や一つの大学出身者のようにある特定の共同体の中から現れることは、それが文化や価値観と密接に関係することを表している。またいくつかの新興産業都市で革新的行動が群発することは、それがそこに形成される慣習に負うことを示している (Saxenian, 1994)。

革新的行動の背景にはそれを何らかの形で鼓舞し、成功を確信させる価値観が必要であるが、その価値観は制度化された知識によって形成される。これは情報と、それを受け取るために必要な知識の関係を象徴している。知識体系を情報化することはこの意味で企業家精神の発現のための基盤を掘崩してしまう。制度を放棄した逸脱者の間に新しい秩序が形成されれば、それは制度の進化と言える。社会制度は革新者の逸脱的行動による破壊と追従者たちによる形成を繰り返して進化したのである。この反復は過去から営々として続くものであり、それ自体を警戒する必要はない。情報そのものは中立的なものでありそれが大量に流通すること自体では、わ

れわれの社会が大きく変化することはないのだ。しかし、それが思考の基盤を形作る制度知とかかわることによって、われわれの生活のパターンを変え、ひいては制度そのものを変化させてしまう。

ここまでの議論では、社会的知識、制度化された知識を強調したが、これは情報の持つ役割を軽視しているわけではない。だが、競争社会に関する通常の議論の中では、情報の役割が強調され、われわれの思考の基礎となり社会を形成している制度知の重要性は、しばしば見落とされている。情報は確かに競争過程において私的な利益の源泉となり、人々に進んで競争の中に身を投じさせるインセンティブとなるが、社会的知識はその競争そのものを維持しているのである。市場は単純な交換の場ではなく、様々な経験的知識を潜在化させたルール束として捉えられなくてはならない。市場で競争するということが、荒野で決闘することと決定的に異なるのは、そこに集う人々がルールの存在を前提として行動するという点にある。先述したように、ルールの存在を前提とすることによって、意識的判断にかかる費用を節約し、不確実性を縮減できる。さらにルールに従うことによってその中に含まれる暗黙知を利用することが可能となるのである。

また、市場以外の社会もまた制度化された知識を内在させるルールによって構成されるとすれば、資本主義、社会主義といった分類は全て形成されたルールの違いに還元する

ことができるし、その中のさらに細かい分類もまた生成したルールの様式から説明される(5)。ある社会を特徴づけるものは、そこに生成する制度の中に蓄積された知識の量であり、ハイエクやホワイトヘッドが主張するように、社会の進化は制度の複雑化と並行しているのだ。

情報もまたそれが複数の人々によって共有されることによって、制度的に振る舞うことがある。法人企業が支配的となった資本主義社会では、むしろ情報はルールの振る舞うことを求められているといってもよい。ケインズは、株式市場などでの人々の期待の形成を新聞誌上での美人投票に例え、投資家の期待が企業そのものの評価ではなく、他の投資家の期待形成によって左右されることを指摘した。この場合、自分の選択もまた他人の意志決定のための情報となり、無限の他者準拠性という制度的性格を獲得する。しかし、この制度が一時的で頑健性を持たないのは、その基礎となるのが社会的な知識ではなく、投資家本人が理性的に獲得した情報に過ぎないからである。この同じ構造を持つ二種類の制度が、一方はバブルを生みだし、一方がわれわれの社会の文化的基礎を形成することになる決定的な理由は、そこに含まれるものの質と量の差である。情報が制度そのものの維持のためには受容者の意識的解釈を必要とするのに対して、知識に基づく制度は利用者の意識的行動を必要としない。バブルのように人々の意識的解釈(限定された合理性の範囲であるとしても)

を必要とする場合、意識的解釈による崩壊の危険性にもまた、本質的に曝されることになる。これに対して、知識を内在させる制度は、そこに内在された知識自体が制度を維持するように働くので利用者はその存続を意識的に努める必要がない。情報 (information) が中立的である一方で、知識 (knowledge) が体系性を持つという差が、それぞれが作り上げる制度の性格と耐久性を決定的に変えてしまう。

情報をすばやく捉え革新的な行動を採ることによって利潤を得るといふ市場社会での単純な原則が、伝統や慣習に多くを依存するということは一見逆説的であるが、市場そのものがルールの束であることを考えれば、論理的な帰結である。加えて、革新的な行動により新たな制度が生成されるかどうか、安定と発展を両立させるポイントとなるであろう。

#### V. 制度的行動と意志決定

個々人の思考は、彼もしくは彼女が置かれている社会に存在する知識によって左右される。個々人の思考は、社会に存在する知識の断片を示すものである。彼らの思考が他とは異なる唯一性を持つように見えるのは、一個人が様々な社会に属し、何層にも重なった社会的知識の層の一部分を形成するからである。様々な社会の知識の積集合として成立する個人的知識は見た目の、唯一性、独立性とは裏腹に、それぞれの社会の持つ社会的知識の質的变化の影響を強く受けることに

なる。

われわれは一日のうち何回も選択を迫られる。そのほとんどが慣習的に処理されるので選択したことにすら気がつかない。だが、それまでの日常とはやや異なった状況に直面したとき、習慣による無意識的な処理はストップし、意識的な選択が必要となる。例えば一つの選択肢AかBかを選ぶ場合、目的合理的に選択が可能である場合にはそれに従えばよい。計算可能性の問題があるにしても、いくつかの方法（知識の階層化、経験の反映など）で解決が可能であるかも知れない。しかし、問題はAかBか目的合理的には判断が付かない場合である。この場合、先述したように、目的性ではなく価値性に基づく判断が重要になる。

この問題は経済過程よりも政治過程の方がよりはつきりと現れる。政治過程において、そこに参加する人々の目的が整合的である必然性はなく、集団的行動であるが故の多様性は避け得ないであろう。多くの場合、政治的判断は慣習依存的である。既得権益の保護の正当性がきわめて曖昧であるにもかかわらず、政治過程が保守的になるのは制度的行動の持つ不確実性の低さによる。制度の中には過去の多くの人々の大量の経験が練り込まれており、制度に従うことによってそれを直接知ること無しにそれらを利用することが可能である。慣習的行動はしばしば思考が働いていない消極的な判断として批判されるが、情報の理性的理解にしたがった意志決定と

比べて必ずしも利用している知識の量が少ないわけではないのである。

慣習依存的な行動で処理しきれない事象に、直面したとき初めて意識的な選択を行わなければならないことは既に述べた。この場合、制度知は、人々の判断の基準となる価値観の形成に寄与する。つまり、最初に述べたようにわれわれの個人的な知識が社会的知識によるものである限り、新たな事象に対する意識的な対処においても、社会的知識が間接的に関係することになる。

極端な二つの例を考えよう。一つは、完全に社会的な価値観にのみ基づいて状況の判断をする場合、もう一つは、全く社会的な価値観抜きで対処しようとする場合である。前者の場合、経済的効率性などの論理的判断基準ではなく、一定の価値観に基づいた判断が優先されることになる。これは一貫した判断が可能になる一方で、あり得るであろう多用な未来の可能性を閉ざしてしまう。これは進化的に見れば安定的で頑健な社会を形成し得ない。効率性基準に照らさないうちにも、社会の存続自体が社会の最大の目的であると考へれば、完全に一つの価値観に基づいた社会形成は不適切であることになる。また、ローカルな価値観に基づいて閉鎖された社会の中で作り上げた制度が、グローバルな標準と矛盾する場合もある。強力な価値観は、異なる価値観との軋轢を引き起こすのである。

後者の場合、先述した様に論理的に判断がつかない状況において、結局選択が不可能になる。また、合理性のみに基づいた意志決定はしばしば理念的一貫性を欠き、合理性以上に価値性を要求される政治過程においては批判の対象となる。特に多数の人々の利害が対立する可能性の多い民主主義社会において、社会的な価値基準は議論の落としどころを探る上での指針となる。また、国内的には搾取と専政によって特徴づけられていた貴族階級が、外交においてきわめて有能に働き得たのは、彼らが自国の伝統や文化をはつきりと意識し体現していたからである。

理想的な状態がこの極端な例の間のどこかにあることは言うまでもない。だが、社会に存在する様々な過程を靜態的に見るべきではない。理想状態は必ずしも安定的な状態ではなく、むしろ歴史的な変化の累積の中で、どちらの側にも振れる可能性があるし、現実の世界では実際に幾度となく振れていたと言える。知識の情報化は曖昧なものとの否定をも含むときがある。ハイエクが設計主義的合理主義と呼んだ十九世紀の知的活動は、伝統的な制度の理性的に捉えられるものへの変換であった。この活動はやがて二十世紀に入って国家社会主義の建設へと繋がるのである。

## VI. 結び

大量情報化社会の到来が叫ばれ初めて久しいが、実はわれ

われはもともと大量の知識の中で生きていたわけであり、現在の状況はメディアの技術的な発達により知識が断片化され流通させられているに過ぎない。むしろこれまで、人類は歴史的に生成してくる制度を用いて、これらの大量の知識に直接対面しなくても済んできたのである。知識の情報化が、その様な制度の堀崩しによってなされているのなら、それは歴史的、文明的には後退していると言わざるを得ない。この情報化の流れが歴史上繰り返されてきた企業家による旧制度の破壊と新制度の構築の過程ならば問題は大きくない。しかし、制度がコミュニケーションのツールであることを考慮すると、もし制度の再構築ができない場合には、コミュニケーションの障害が発生する危険性がある。コミュニケーションの量的質的向上を目的としたメディアの発達が、実質的にはコミュニケーションの可能性を狭めているとするとそれは喜劇的である。

知識の情報化はフランス革命期における共同体の解体にも例えられるであろう。フランス革命後の新世界秩序はナポレオン戦争とウィーン会議を経て構築され、近代資本主義社会が幕を開けた。情報化の波は資本主義社会を止揚するののか、それとも全く別の世界を見せることになるのか、泰山は既に鳴動している。

#### 参考文献

- Hayek, F. A. (1936/1949) "Economics and Knowledge," in *Individualism and Economic Order*. (London: Routledge & Kegan Paul). (嘉治元郎・嘉治佐代訳「経済学と知識」、ハイエク全集3、春秋社、一九六〇年。)
- Hayek, F. A. (1942/1949) "The Fact in Social Science," in *Individualism and Economic Order*. (London: Routledge & Kegan Paul). (嘉治元郎・嘉治佐代訳「社会科学についての事実」、ハイエク全集3、春秋社、一九六〇年。)
- Hayek, F. A. (1945) "The Use of Knowledge in Society," in *Individualism and Economic Order*. (London: Routledge & Kegan Paul). (嘉治元郎・嘉治佐代訳「社会における知識の利用」、ハイエク全集3、春秋社、一九六〇年。)
- Hayek, F. A. (1950) *The Counterrevolution of Science*. (Chicago: Chicago U. Pr.). (佐藤茂行訳「科学による反革命」、木鐸社、一九七九年。)
- Hayek, F. A. (1960) *The Constitution of Liberty*. (London: Routledge & Kegan Paul). (気賀健三・古賀勝次郎訳「自由の条件」I、II、III、ハイエク全集4、5、6 春秋社、一九八六年。)
- Hayek, F. A. (1962/1967) "Rules, Perception and Intelligibility," in *Studies in Philosophy, Politics and Economics*. (Chicago: Chicago U. Pr.)
- Hayek, F. A. (1988) *The Fatal Conceit*. (London: Routledge & Kegan Paul).
- Hodgson, G. (1991) *Economics and Evolution*. (USA: Michigan U. Pr.)

Polanyi, M. (1962) *Personal Knowledge*, (Chicago: Chicago U. Pr.) (長尾史郎訳『個人的知識』、ハーベスト社、一九八五年。)

Polanyi, M. (1966) *The Tacit Dimension*, (London: Routledge & Kegan Paul).

(佐藤敬三訳『暗黙知の次元』、紀伊国屋書店、一九八〇年。)

Saxenian, A. (1994) *Regional Advantage*, (Cambridge: Harvard U. Pr.) (大

前研一訳『現代の二都物語』、講談社、一九九五年。)

塩澤由典 (1990) 『市場の秩序学』、筑摩書房。

#### 注

(1) ハイエクのこのような立場は、認識の枠組みが先験的に与えられているものか、それとも経験的に獲得されるものかという問題に一つの解答を与えたものとして注目される。さらに、それらを全て合理的な判断から論じようとするミーゼスとその後継者たちと著しい対称をなしている。この意味でハイエクは、現代オーストリア学派の中では異端的存在である。

(2) 実際には制度に関する全ての問題は論理的構造に関する限り、コミュニケーションの問題に還元できると考えられる。

(3) 本稿の立場は、目的合理論に基づいた極端な要素還元主義に反対するが、外在的普遍的価値尺度の存在もまた否定するものである。晩年のハイエクが用いた、あるいはヴェブレンの重視した系統発生的進化論的アプローチは、この両方の持つ方法論的問題を克服するものである (Hodgson 1994)。

(4) たとえ、必要とされる情報が有限であるとしても、その量が多

ければ計算可能性の問題があることは塩澤 (1990) で示されたとおりである。

(5) 青木昌彦らの比較制度分析は、目的合理的行為が、歴史的状況の下で、経路依存的な制度を生成させることを示したものである。だが、これは目的的观点を強調する立場からなされたものであり、価値的な行動に関する言及はほとんど見られない。本文でも強調しているように、社会的ルールは、制度知を反映し、その社会の持つ価値観を具体化する。したがって、制度分析には目的論的な分析とともに、知識論的なアプローチが必要なのである。

〔えがしらすむ 小樽商科大学商学部助教授 一九六六愛媛県生 オ  
ーストリア学派経済学および進化経済学の研究〕